

# 安倍歴史修正主義政権を見つめるドイツメディア

梶村道子(ベルリン・女の会)

メルケル首相の訪日で、日本では「煙独」という言葉が生まれたと聞きました。朝日ホールを講演会場に選んだメルケル首相に、日本政府は「この場所でいいのか」と、事前に何度も念を押したそうです。歴史問題に関するメルケル首相の発言は考え抜かれた控え目なものでしたが、ドイツのメディアによる安倍政権報道は事実を端的に言い当てており、本当に日本政府が「煙たい」のはメディアかなという気がします。

そこで、ドイツ語圏メディアが安倍政権の歴史認識をどう評価してきたのか、2013年の参議院選挙以降のプリント／電子メディア約60本を検証してみました。そのどれにも共通するキーワードは「歴史修正主義」ないしは「歴史の書き換え」です。

「戦前へ回帰し、残虐行為を日本の歴史から削除し、朝鮮・中国侵略の事実を否定することを夢みている」(フランクフルター・アルゲマイネ、以下「faz」)、「歴史書き換えの修正主義」(ディ・ヴェルト)、「事実即した教科書の記述を『自虐史観』だと20年間闘ってきた(ズートドイチェ・ツァイトゥンク、以下「SZ」)、「戦後秩序の変更を目論み、憲法改正もそのひとつ」(ノイエ・チュルヒャー・ツァイトゥンク、以下「NZZ」)といった言葉が各紙とも並びます。厳しい評価は閣僚も同じで、「首相同様のごまかし上手、口にするのは河野談話の尊重という空文句ばかりの菅官房長官」(NZZ)、「右翼国粋主義ノスタルジー組織である日本会議メンバーの下村文科相」(SZ)といった具合。安倍政権下で、国粋主義・歴史修正主義者が勢力を拡げていることも指摘されています。河野談話や平和憲法の空洞化をはかり、自国はもとより海外の教科書にまで介入し、国内のマスメディアだけでなく、海外紙にまで圧力をかける安倍政権のやり方と日本メディアの萎縮ぶりを、各紙の駐在員はなかば驚きの日で報じ、安倍政権の歴史修正主義が「どれ程自国を国際的に孤立させているのかが、日本の世論にはほとんどわかっていない」(faz)と危惧しているのです。

こうした報道には馴染みのベルリンで、7月6日、独日平和フォーラム、韓国連合、ベルリン女の

会主催で「日本政府と歴史修正主義」と題する講演会を開催。wam事務局長の渡辺美奈さんと歴史家の田中利幸さんを迎えたこの集会には、約60人が集まりました。

田中さんからは、日本の戦争責任もアメリカの原爆投下責任も問わないという日米間の謀議を背景に、戦争責任を不問に付してきた70年の歴史があること、戦争に対するこの無責任感覚、民族差別および女性差別という3つの問題の解決なしに「慰安婦」問題の解決はないとの指摘がありました。これに対して、戦争責任が70年も放置され続けてきたこと自体が不可解だと、ドイツ人司会者から当然ともいえる疑問が出ました。日本は平和運動の中でさえ「戦争はダメ」以上のことを語ってきませんでした。「最近、若者の間でも元日本兵の語りへの自己同一化が増えている、そこでは加害は伝わらない」との渡辺さんの警告は、戦後日本が解くことができなかった問題です。

渡辺さんは、日本軍「慰安婦」問題アジア連帯会議が提出した「日本政府への提言」の根幹は、日本政府が具体的な事実と責任を認めることだと解説。また、「強制連行」という被害の入口を否定することで日本軍性奴隷制の全否定をはかる安倍政権の戦略の分析は実に明快でした。1993年までに政府が発見した資料に限定し、証言を排除し、「狭義の強制」に限って証拠はみつからなかったとしながら、この解釈を全体に拡げて「強制連行の証拠はなかった」とする安倍政権の詐術。

解釈の変更こそ修正主義安倍政権の常套口です。先のユネスコ遺産決定に際しても、英語の「forced to work」は「強制労働」を意味しないと岸田外相がさっそく「解釈」してみせました。安倍政権の「ごまかし」を、しかし海外世論は見逃さないでしょう。日本が事実を目をつむるなら国外で知ってもらおうと、ベルリンでは今年、富山

妙子さんと中垣克久さんが出展した韓国・台湾・日本の作家による「禁じられた画像」展も開かれました。8月14日には、ブランデンブルク門前で元日本軍「慰安婦」メモリアル・デーに連帯するスタンディング・デモもやります！

ドイツメディアの「煙たい」報道も、安倍政権が倒れるまで続くことでしょう。



「煙たい」独メディア。フランクフルター・アルゲマイネは保守系、ズートドイチェは中道左派系だが、どちらも安倍政権の歴史認識には批判的(撮影:筆者)



光州蜂起から3.11まで、富山さんの全仕事ならぶ「禁じられた画像」展。「海の記憶」や「蛭子と傀儡子」のコラージュは初公開(撮影:梶村太一郎)